

病虫害発生予察情報

- 1 令和 8 年度 病虫害発生予察 予報第 5 号（8 月）
2 気 象 情 報 九州北部地方 1 か月予報（福岡管区气象台）
气象台メモ（大分地方气象台）

向こう 1 か月間における農作物の主な病虫害の発生動向は、次のように予想されます。

◎予報内容の概況

作 物	病 害 虫 名	発 生 面 積		発 生 量		ペ ー ジ 数
		平 年 比	前 年 比	平 年 比	前 年 比	
水 稲	いもち病（葉）	やや少ない	やや少ない	やや少ない	やや少ない	-
	いもち病（穂）	平 年 並	前 年 並	平 年 並	前 年 並	P.2
	紋 枯 病	平 年 並	前 年 並	平 年 並	前 年 並	P.3
	白 葉 枯 病	平 年 並	前 年 並	平 年 並	前 年 並	P.4
	トビイロウンカ	平 年 並	前 年 並	平 年 並	前 年 並	P.4
	コブノメイガ	やや多い	やや多い	平 年 並	前 年 並	P.5
大 豆	斑点米カメムシ類	平 年 並	少ない	平 年 並	少ない	P.6
	ハスモンヨトウ	平 年 並	やや少ない	平 年 並	やや少ない	P.6
温州ミカン	黒 点 病	やや多い	前 年 並	平 年 並	多 ない	P.7
	ミカンハダニ	やや多い	やや多い	平 年 並	少 ない	P.7
カボス	かいよう病	平 年 並	前 年 並	やや少ない	やや少ない	P.8
	黒 点 病	やや多い	前 年 並	平 年 並	少 ない	P.8
	ミカンハダニ	平 年 並	やや少ない	平 年 並	少 ない	P.9
ナシ	黒 星 病	平 年 並	前 年 並	やや少ない	前 年 並	P.9
	ハダニ	やや多い	少 ない	平 年 並	少 ない	P.10
ブドウ	ベ と 病	やや少ない	少 ない	やや少ない	少 ない	P.10
果樹共通	果樹カメムシ類	多 ない	多 ない	多 ない	多 ない	P.10
夏秋トマト	すすかび病	やや少ない	前 年 並	平 年 並	前 年 並	P.11
	うどんこ病	やや少ない	やや少ない	平 年 並	やや少ない	P.12
	灰色かび病	平 年 並	前 年 並	平 年 並	前 年 並	-
	コナジラミ類	平 年 並	前 年 並	平 年 並	前 年 並	P.13
	ハモグリバエ	平 年 並	前 年 並	平 年 並	前 年 並	-
	トマトキバガ	-	前 年 並	-	やや多い	P.14
夏秋ピーマン	うどんこ病	やや少ない	前 年 並	やや少ない	前 年 並	P.15
	斑 点 病	やや多い	前 年 並	平 年 並	少 ない	P.16
	タバコガ	平 年 並	前 年 並	平 年 並	前 年 並	-
	アブラムシ類	やや多い	多 ない	やや多い	多 ない	P.17
	アザミウマ類	多 ない	やや多い	多 ない	多 ない	P.18
白ネギ （平坦地）	黒 斑 病	やや多い	前 年 並	やや多い	前 年 並	-
	ネギアザミウマ	多 ない	前 年 並	平 年 並	少 ない	P.19
	ネギハモグリバエ	平 年 並	少 ない	平 年 並	少 ない	P.20
	シロイチモジヨトウ	やや多い	前 年 並	やや多い	多 ない	P.21
白ネギ （中山間地）	黒 斑 病	平 年 並	前 年 並	平 年 並	多 ない	-
	ネギアザミウマ	平 年 並	やや少ない	平 年 並	少 ない	P.22
	ネギハモグリバエ	平 年 並	少 ない	平 年 並	前 年 並	P.23
イチゴ （育苗圃）	炭 疽 病	やや多い	多 ない	平 年 並	多 ない	P.24
	うどんこ病	平 年 並	少 ない	平 年 並	少 ない	P.24

◎注意事項 上記一覧表病虫害のゴシック体のみ以下に個別の記述をしています。

- ◎特記事項 令和 8 年度病虫害防除技術情報第 5 号（水稻 トビイロウンカ）：令和 8 年 7 月 13 日
令和 8 年度病虫害発生予察注意報第 3 号（果樹全般 果樹カメムシ類）：令和 8 年 7 月 15 日
令和 8 年度病虫害防除技術情報第 6 号（ピーマン ハダニ類）：令和 8 年 7 月 21 日
令和 8 年度病虫害防除技術情報第 7 号（落葉果樹 ハダニ類）：令和 8 年 7 月 21 日
令和 8 年度病虫害発生予察注意報第 4 号（ピーマン アザミウマ類）：令和 8 年 7 月 22 日
令和 8 年度病虫害発生予察注意報第 5 号（トマト トマトキバガ）：令和 8 年 7 月 22 日
令和 8 年度病虫害防除技術情報第 8 号（夏期における白ネギ害虫防除）：令和 8 年 7 月 29 日

水稻

1 いもち病（穂）

（１）予報内容

発生時期：平年並

発生面積：平年並

発生量：平年並

（２）予報根拠

ア 7月中旬の巡回調査では、早期水稻においては穂いもちの発生圃場率、平均発病度ともに平年より高く、普通期水稻においては葉いもちの発生圃場率、平均発病度ともに平年より低かった。

早期水稻における穂いもち発生状況

発生圃場率：本年 20.0%（平年 3.5%、前年 0%）

平均発病度：本年 1.1（平年 0.2、前年 0）

普通期水稻における葉いもち発生状況

発生圃場率：本年 7.7%（平年 16.1%、前年 2.6 %）

平均発病度：本年 0.2（平年 1.0、前年 0.03）

イ 農業研究部の予察田では、7月24日調査においてヒノヒカリで発生が認められた。

発病株率（7月24日調査）

つや姫 0%（平年 0%、前年 0%） ヒノヒカリ 2%（平年 7.6%、前年 0%）

なつほのか 0%（平年 ー、前年 0%）

平均発病度（7月24日調査）

つや姫 0%（平年 0%、前年 0%） ヒノヒカリ 0%（平年 9.8%、前年 0%）

なつほのか 0%（平年 ー、前年 0%）

ウ 7月1日～7月20日の期間における BLASTAM による各アメダス観測地点での葉いもち感染好適条件の発生は以下のとおりであった。

院内	なし	竹田	7/1、7/5
日田	なし	佐伯	7/1、7/5
玖珠	なし	宇目	7/1、7/2、7/6

エ 水田農業グループの作柄判定試験では7月15日現在、6月19日移植ヒノヒカリで草丈は平年より低く、葉色は平年より淡い。

オ 本病は冷涼、湿潤条件が発病に好適であるが、向こう1か月の気象予報によれば、平均気温は低い確率 10%、平年並 20%、降水量は平年並 40%、多い確率 20%と予想されている（気象予報参照）。

カ 水稻いもち病防除に対する QoI 剤（ストロビルリン系殺菌剤）については、令和4年度に本剤耐性菌の発生が確認されているため、引き続き耐性菌の再発や拡散を防ぐことが重要である。そこで、やむを得ず水稻（WCS も含む）に使用する場合は、「水稻に QoI 剤を使用する場合の対応マニュアル（平成 28 年 11 月 10 日付地域農業振興課、JA 全農おおいの公表（URL: https://www.pref.oita.jp/uploaded/life/2213301_4504493_misc.pdf））」に準じた使用を行う。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 葉いもちの発生が多い場合は、直ちに防除を行い、穂肥を控え目に施用する。
- イ 穂いもちの防除は、出穂約2週間前の粒剤施用と穂揃期の液剤または粉剤散布、あるいは、穂ばらみ期と穂揃期の液剤または粉剤による2回散布を基本とする。出穂期を見極め、防除適期を失しないよう注意する。

2 紋枯病

(1) 予報内容

発生面積：平年並

発生量：平年並

(2) 予報根拠

- ア 7月中旬の巡回調査では早期水稲、普通期水稲ともに発生は確認されなかった。
早期水稲における発生状況
発生圃場率 : 0% (平年: 13.4%、前年: 10.0%)
平均発病度 : 0 (平年: 0.2、前年: 0.1)
普通期水稲における発生状況
発生圃場率 : 0% (平年: 0.3%、前年: 0%)
平均発病度 : 0 (平年: 0.0、前年: 0)
 - イ 農業研究部の予察田では、なつほのか、つや姫、ヒノヒカリともに、発生は確認されていない。
(7月24日調査)
発病株率 (7月24日調査)
つや姫 0% (平年 0.7%、前年 6.0%) ヒノヒカリ 0% (平年 0.8%、前年 8.0%)
なつほのか 0% (平年 —、前年 16.0%)
平均病斑高率 (7月24日調査)
つや姫 0% (平年 0.1%、前年 1.0%) ヒノヒカリ 0% (平年 0.2%、前年 1.6%)
なつほのか 0% (平年 —、前年 3.0%)
 - ウ 水田農業グループの作況判定試験では7月15日現在、6月19日移植ヒノヒカリで茎数は平年より多い。
 - エ 本病は高温多湿条件で発生が助長されるが、向こう1か月の気象予報によれば、平均気温は、平年並20%、高い確率70%、降水量は、平年並40%、多い確率20%と予想されている(気象情報参照)。
- ### (3) 防除上注意すべき事項
- ア 株元の高温多湿は本病の発生を助長するので、過繁茂にならないよう栽培管理を徹底し、間断灌水を行うとともに適切な肥培管理に努める。
 - イ 本病の発生は圃場間差が大きい。昨年多発した圃場では本年も発生することが予想されることから、既に発生が確認される圃場では防除を行い、水平進展を抑制することに努める。
 - ウ 本病の垂直進展は直接の減収につながるため、出穂1~2週間前の防除適期には薬剤散布を実施する。

3 白葉枯病

(1) 予報内容

発生地域：常習発生地

発生面積：平年並

発生量：平年並

(2) 予報根拠

ア 7月中旬の巡回調査では早期水稻、普通期水稻ともに確認されなかった。

早期水稻における発生状況

発生圃場率：0%（平年：2.3 %、前年：0%）

平均発病度：0（平年：0.02、前年：0）

普通期水稻における発生状況

発生圃場率：0%（平年：0 %、前年：0%）

平均発病度：0（平年：0、前年：0）

イ 本病は風雨とそれに伴う浸冠水により発病が助長される（気象予報参照）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 常習発生地では、暴風雨後は直ちに薬剤散布を行う。

イ FRAC コード「PO2」（プロベナゾール（オリゼメート）粒剤）の出穂 20～30 日前の施用は、本病といもち病との同時防除剤として効果が高い。

4 トビイロウンカ（令和 8 年 7 月 13 日 病害虫防除技術情報 第 5 号発表）

(1) 予報内容

発生面積：平年並

発生量：平年並

(2) 予報根拠

ア 7月中旬の巡回調査では、早期水稻、普通期水稻ともに発生が確認されなかった。

普通期水稻における発生状況（発生圃場率は、株当たり 1 頭以上の圃場率）

発生圃場率：0%（平年：0 %、前年：0 %）

株当たり虫数：0（平年：0.0、前年：0.0）

イ 予察灯においては 7 月 20 日現在、誘殺は確認されていない（平年の初誘殺日：7 月 24 日）。

ウ 予察田における 7 月 24 日の調査では、成幼虫は確認されていない。

エ 本虫は海外飛来性害虫であり、梅雨前線の影響で飛来が増加する傾向があるが、本年の梅雨明けは 7 月 8 日で平年（7 月 19 日）より 11 日早かった。

オ 本虫は高温、少雨により発生が助長されるが、猛暑時には発育が抑制される。向こう 1 か月の気象予報によれば、平均気温は平年並 20%、高い確率 70%、降水量は少ない確率 40%、平年並 40%と予想されている（気象予報参照）。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 飛来第2世代以降の増殖を抑えるために、8月下旬の基幹防除を徹底する。
- イ 本虫は株元に生息するので、薬剤が株元に到達するように散布する。また、畦畔よりも水田の中央部に発生しやすいので水田内をよく確認し、成幼虫が8月上旬に株当たり0.2頭以上、8月中下旬に株当たり1頭以上生息していた場合は直ちに防除を行う。
- ウ 本虫は増殖力が高く急速に密度が高まるので、圃場の見回りを行い防除が手遅れにならないように注意する。

5 コブノメイガ

(1) 予報内容

発生面積：やや多い

発生量：平年並

(2) 予報根拠

- ア 7月中旬の巡回調査では、発生圃場率は平年よりやや高く、25株当たり苞数は平年よりやや少なかった。

普通期水稻における発生状況

発生圃場率：12.8%（平年：10.7%、前年：2.6%）

25株当たり苞数：0.2（平年：0.5、前年：0.0）

- イ 予察田における7月24日の調査では、ヒノヒカリ、なつほのかで被害苞が確認されている。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 圃場を見回り、発蛾最盛期を確認する。
- イ 粒剤による防除は、発蛾最盛期に圃場を湛水して行う。
- ウ 粉剤や液剤による防除は、発蛾最盛期の5～7日後に行う。
- エ 本虫は多肥田や湿田で多発する傾向があるので、肥料の多用を控える。

6 斑点米カメムシ類

(1) 予報内容

発生時期：出穂期以降

発生面積：平年並

発生量：平年並

(2) 予報根拠

- ア 6月中旬の早期水稻におけるすくい取り調査では、斑点米カメムシ類は0.9頭で平年の3.0頭より少なかった。
- イ イネカメムシは本年度では7月中旬の巡回調査では普通期水稻39圃場中1圃場で成虫の発生が認められている。昨年までに県北東部や西部の一部地域で確認されており、発生および分布拡大が懸念される。
- ウ 本虫は高温、少雨により発生が助長されるが、向こう1か月の気象予報によれば、平均気温は平年並20%、高い確率70%、降水量は少ない確率40%、平年並40%と予想されている（気象予報参照）。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 防除は穂揃期に穂いもちの2回目防除と同時に行う。
- イ 発生の多い圃場では、穂揃期とその7～10日後の2回散布を行う。
- ウ 斑点米カメムシ類は発生量が少なくても玄米の検査等級低下の原因となる斑点米をつくるので、穂揃期以降の防除を徹底する。
- エ 畦畔の除草は本田への飛来防止のため、出穂10日前までに行う。
- オ イネカメムシは出穂前から圃場に侵入するので、本種の発生が確認されている地域では、防除効果が高い出穂直後に1回目の農薬散布を行い、その7～10日後に2回目の散布を行う。

大豆

1 ハスモンヨトウ

(1) 予報内容

発生面積：平年並

発生量：平年並

(2) 予報根拠

- ア 農業研究部に設置しているフェロモントラップの誘殺数は、7月1～4半旬は58頭で平年(111.7頭)より少ない。
- イ 県内のフェロモントラップの誘殺数は、平年並に推移している。
- ウ 本虫は高温、少雨により発生が助長されるが、平均気温は平年並20%、高い確率70%、降水量は少ない確率40%、平年並40%と予想されている（気象予報参照）。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア ふ化直後の幼虫は、分散前に卵塊周囲の葉裏を集団で加害し白変葉を生じるため、発生を認めたら、葉裏まで十分薬剤がかかるよう防除を行う。
- イ 薬剤感受性が地域により異なるので、薬剤散布後は必ず圃場の見回りを行い、効果が不十分な場合は系統の異なる薬剤による追加防除を行う。

カンキツ（温州ミカン）

1 黒点病

（１） 予報内容

発生面積：やや多い

発生量：平年並

（２） 予報根拠

ア 7月中旬の巡回調査では、発生圃場率、平均発病果率、平均発病度ともに平年より高かった。

（果実）発生圃場率：30.0%（平年 19.3%、前年 33.3%）

平均発病果率：8.0%（平年 2.8%、前年 3.5%）

平均発病度：1.6（平年 0.9、前年 1.7）

イ 本病は降雨により発生が助長されるが、向こう1か月の気象予報によれば、降水量は、平年並40%、多い確率20%と予想されている（気象情報参照）。

（３） 防除上注意すべき事項

ア 伝染源である枯れ枝の剪除徹底に努める。

イ 定期的な予防散布を徹底する（降水量250～300mmごと）。ただし降雨が少ない場合でも、1か月に1回予防を行う。

ウ 園地の立地条件により降水量が異なるため、園地に簡易な雨量計を設置し、積算雨量を次回防除の目安とする。

2 ミカンハダニ

（１） 予報内容

発生面積：やや多い

発生量：平年並

（２） 予報根拠

ア 7月中旬の巡回調査では、発生圃場率は平年より高く、平均寄生葉率は平年より低かった。

（葉）発生圃場率：30.0%（平年 18.2%、前年 20.0%）

平均寄生葉率：0.8%（平年 1.4%、前年 3.2%）

イ 本病は高温乾燥条件で発生が助長されるが、向こう1か月の気象予報によれば、平均気温は、平年並20%、高い確率70%、降水量は、少ない確率40%、平年並40%と予想されている（気象情報参照）。

（３） 防除上注意すべき事項

ア 発生に注意し、初期防除を徹底する。

イ 抵抗性の出現を回避するため、同一系統薬剤は年1回の使用とする。

カンキツ（カボス）

1 かいよう病

（１）予報内容

発生面積：平年並

発生量：やや少ない

（２）予報根拠

ア 7月中旬の巡回調査では、葉における発生圃場率は平年より低く、平均発病葉率はやや低く、平均発病度は平年並であった。果実における発生圃場率、平均発病果率、平均発病度はともに平年より低かった。

（葉） 発生圃場率：11.1%（平年 20.0%、前年 11.1%）

平均発病葉率： 1.9%（平年 2.8%、前年 2.7%）

平均発病度： 0.8 （平年 1.0 、前年 1.4 ）

（果実）発生圃場率： 0%（平年 10.0%、前年 33.3%）

平均発病果率： 0.6%（平年 1.4%、前年 3.0%）

平均発病度： 0.1 （平年 0.5 、前年 1.2 ）

イ 本病は降雨により発生が助長されるが、向こう1か月の気象予報によれば、降水量は、平年並40%、多い確率20%と予想されている（気象情報参照）。

（３）防除上注意すべき事項

ア 収穫期までは台風の発生に注意し、襲来前の予防散布を徹底する。

イ 伝染源となる罹病枝葉や罹病果実の除去を徹底する。

ウ ミカンハモグリガ加害痕からの感染を防ぐため、夏秋梢発生樹ではミカンハモグリガの防除を徹底する。

2 黒点病

（１）予報内容

発生面積：やや多い

発生量：平年並

（２）予報根拠

ア 7月中旬の巡回調査では、発生圃場率は平年より高く、平均発病果率、平均発病度は平年よりやや高かった。

（果実）発生圃場率：44.4%（平年 22.3%、前年 44.4%）

平均発病果率： 7.6%（平年 6.1%、前年 14.8%）

平均発病度： 2.9 （平年 2.2 、前年 3.7 ）

イ 本病は降雨により発生が助長されるが、向こう1か月の気象予報によれば、降水量は、平年並40%、多い確率20%と予想されている（気象情報参照）。

（３）防除上注意すべき事項

ア 今月から収穫期に入るため薬剤による防除は控え、伝染源となる枯れ枝除去を徹底する。

3 ミカンハダニ

(1) 予報内容

発生面積：平年並

発生量：平年並

(2) 予報根拠

ア 7月中旬の巡回調査では、発生圃場率は平年よりやや低く、平均寄生葉率は平年より低かった。

(葉) 発生圃場率：22.2% (平年 28.9%、前年 33.3%)

平均寄生葉率：1.9% (平年 5.2%、前年 12.8%)

イ 本病は高温乾燥条件で発生が助長されるが、向こう1か月の気象予報によれば、平均気温は、平年並 20%、高い確率 70%、降水量は、少ない確率 40%、平年並 40%と予想されている（気象情報参照）。

(3) 防除上注意すべき事項

温州ミカンの項を参照

ナシ

1 黒星病

(1) 予報内容

発生面積：平年並

発生量：やや少ない

(2) 予報根拠

ア 7月中旬の巡回調査では、発生が認められなかった。葉および果実の発生圃場率、平均発病葉果率ともに平年より低かった。

(葉) 発生圃場率：0% (平年 5.8%、前年 0%)

平均発病葉率：0% (平年 0.3%、前年 0%)

(果実) 発生圃場率：0% (平年 2.5%、前年 0%)

平均発病果率：0% (平年 0.0%、前年 0%)

イ 本病はやや低温・降雨により発生が助長されるが、向こう1か月の気象予報によれば、平均気温は、低い確率 10%、平年並 20%、降水量は、平年並 40%、多い確率 20%と予想されている（気象予報参照）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 幸水、豊水は本病に弱いので予防散布を徹底する。特に無袋栽培では収穫前の果実での発病に注意する。

イ FRAC コード「3」（DMI 系薬剤）は連用すると耐性菌が出現しやすいので、年3回までの使用とする。

ウ 発病葉や発病果は伝染源となるので、速やかに圃場外に持ち出し処分する。

2 ハダニ類（令和 8 年 7 月 21 日 病害虫防除技術情報 第 7 号発表）

（1）予報内容

発生面積：やや多い

発生量：平年並

（2）予報根拠

ア 7月中旬の巡回調査では、発生が認められず、発生圃場率、平均寄生葉率ともに平年より低かった。しかし、8圃場中3圃場で死虫が多く確認された。

（葉） 発生圃場率：0%（平年 48.8%、前年 50.0%）

平均寄生葉率：0%（平年 12.2%、前年 5.6%）

イ 本虫は高温乾燥条件で発生が助長されるが、向こう1か月の気象予報によれば、平均気温は、平年並 20%、高い確率 70%、降水量は、少ない確率 40%、平年並 40%と予想されている（気象予報参照）。

（3）防除上注意すべき事項

ア 発生に注意し、初期防除を徹底する。

イ 抵抗性の出現を回避するため、同一系統薬剤は年1回の使用とする。

ブドウ

1 ベと病

（1）予報内容

発生面積：やや少ない

発生量：やや少ない

（2）予報根拠

ア 7月中旬の巡回調査では、発生が認められず、発生圃場率、平均発病葉率ともに平年より低かった。

（葉） 発生圃場率：0%（平年 32.4%、前年 25.0%）

平均発病葉率：0%（平年 3.6%、前年 1.2%）

イ 本病は低温・降雨により発生が助長されるが、向こう1か月の気象予報によれば、平均気温は、低い確率 10%、平年並 20%、降水量は、平年並 40%、多い確率 20%と予想されている（気象予報参照）。

（3）防除上注意すべき事項

ア 発病すると防除が困難となるので、予防散布を徹底する。特に台風前後は防除に努める。

果樹共通

1 果樹カメムシ類（チャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシ、クサギカメムシ）

（令和 8 年 7 月 15 日 病虫害発生予察注意報 第 3 号発表）

（1）予報内容

発生面積：多い

発生量：多い

（2）予報根拠

- ア 各地点のフェロモントラップにおける優占種はチャバネアオカメムシで、誘殺数は平年並～平年より多く推移している。
- イ 本虫は高温条件で飛来が助長されるが、向こう 1 か月の気象予報によれば、平均気温は、平年並 20%、高い確率 70%と予想されている（気象予報参照）。

（3）防除上注意すべき事項

- ア カメムシ類の園内への飛来は地域や園地により大きく異なるので、園内外をこまめに見回り早期発見に努める。
- イ 薬剤散布はカメムシ類が園地に飛来する夕暮れ時に行うと効果的であり、地域全体での一斉防除はより効果的である。
- ウ 殺虫剤の多用は天敵等への影響が大きくハダニ類の発生を助長するので、最小限の使用にとどめる。

夏秋トマト

1 すすかび病

（1）予報内容

発生面積：やや少ない

発生量：平年並

（2）予報根拠

- ア 7 月中旬の巡回調査では発生が認められず、発生圃場率、平均発病葉率ともに平年より低かった。
発生圃場率：0%（平年 17.5%、前年 0%）
平均発病葉率：0%（平年 1.5%、前年 0%）
- イ 本病は高温多湿条件で発生が助長されるが、向こう 1 か月の気象予報によれば、平均気温は、平年並 20%、高い確率 70%、降水量は、平年並 40%、多い確率 20%と予想されている（気象情報参照）。

（3）防除上注意すべき事項

- ア 肥料切れ、過繁茂、排水不良は病勢の進展を助長するので、下葉のつみ取り等を行って圃場内の通風を良くし、初期防除を徹底する。
- イ 施設内の換気を十分行い、過湿防止に努める。
- ウ 治療効果のある薬剤は概ね効果が低いので、予防効果のある薬剤を定期的に散布し予防を徹底する。

2 うどんこ病

(1) 予報内容

発生面積：やや少ない

発生量：平年並

(2) 予報根拠

ア 7月中旬の巡回調査では、発生圃場率、平均発病葉率ともに平年より低かった。

発生圃場率：10.0%（平年：33.8%、前年 30.0%）

平均発病葉率：1.3%（平年：4.0%、前年 1.9%）

イ 本病は乾燥条件で発生が助長されるが、向こう1か月の気象予報によれば、降水量は、少ない確率40%、平年並40%と予想されている（気象情報参照）。

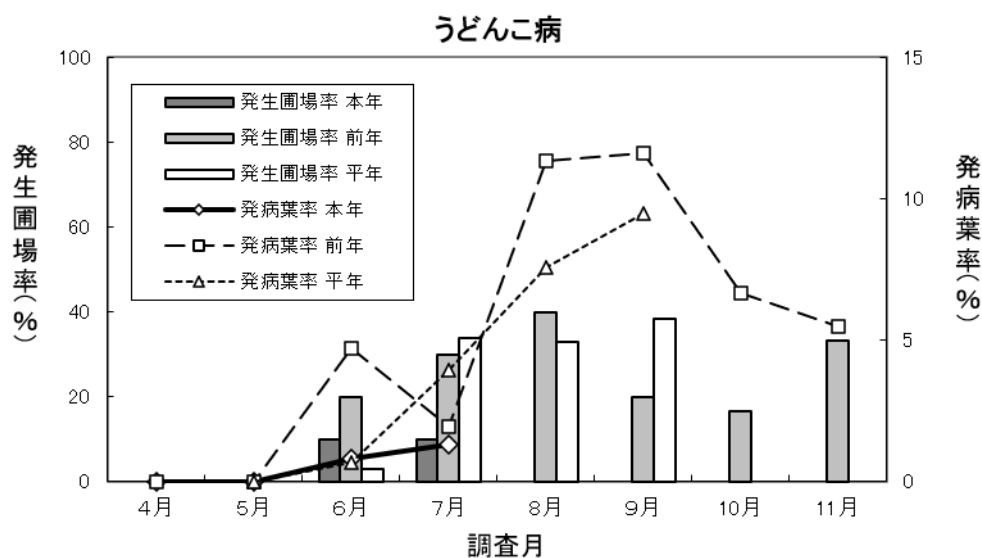
(3) 防除上注意すべき事項

ア 一旦発生すると防除が困難になるので早期発見に努め、防除は予防散布や初期散布に重点を置くとともに葉裏に十分薬剤がかかるようにする。

イ 発病初期のうちに治療効果の高い薬剤を中心に、散布間隔を短くするなどして集中的に散布する。

ウ 発病葉は伝染源となるのでこまめに除去し、圃場外に持ち出して処分する。

エ FRACコード「3」（EBI系薬剤）は連用すると耐性菌を生じやすいので、系統の異なる薬剤とのローテーション（輪番）使用を心がける。



3 コナジラミ類

(1) 予報内容

発生面積：平年並

発生量：平年並

(2) 予報根拠

ア 7月中旬の巡回調査では、発生圃場率は平年並、平均株当虫数は平年より低かった。

発生圃場率：10.0%（平年 11.5 %、前年 10.0 %）

平均株当虫数：0.4 頭（平年 0.7 頭、前年 0.2 頭）

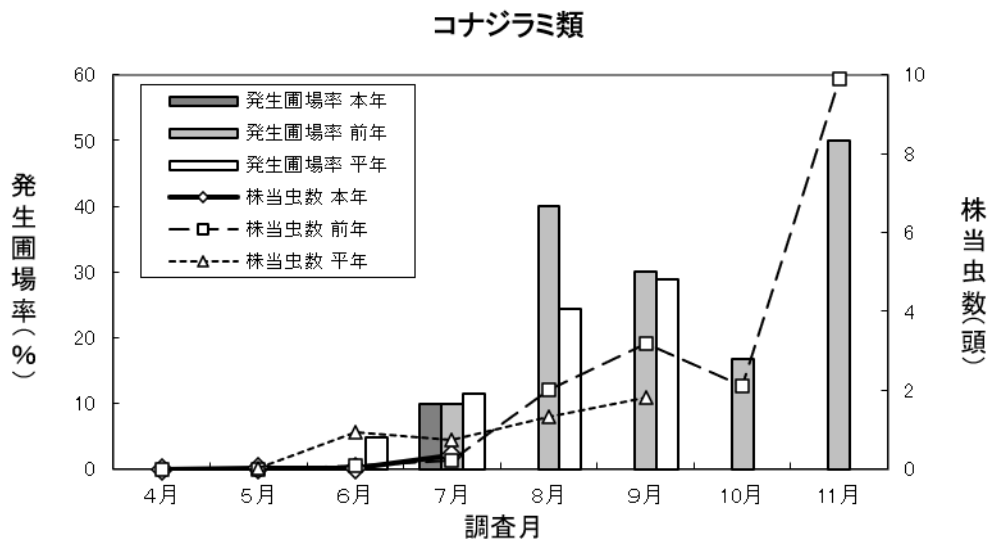
イ 本虫は高温乾燥条件で発生が助長されるが、向こう1か月の気象予報によれば、平均気温は、平年並 20%、高い確率 70%、降水量は、少ない確率 40%、平年並 40%と予想されている（気象情報参照）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 本虫は葉裏に寄生して吸汁加害し繁殖も旺盛なため、早期発見に努め低密度のうちに防除を行う。

イ 本虫は多種の雑草にも寄生し増殖するので、圃場内外の除草を徹底する。

ウ タバココナジラミはトマト黄化葉巻ウイルス（TYLCV）を、またコナジラミ類はトマトクロロシスウイルス（ToCV）を媒介するため、薬剤散布を徹底するとともに、防虫ネットなどを使用してハウス内への侵入を阻止する。



4 トマトキバガ（令和8年7月22日 令和8年度病害虫発生予察注意報 第5号発表）

（1）予報内容

発生面積：前年並

発生量：やや多い

（2）予報根拠

ア 7月上旬期のトマトキバガフェロモントラップ調査では、1地点当たりの誘殺数は前年よりやや多かった。6月末時点のトマトキバガ食害調査では、累計食害戸数は前年並であった。

平均誘殺数（合計）：99.3頭（前年：72.2頭、前々年：5.2頭）

イ 6月末時点のトマトキバガ食害調査では、累計10戸で葉への被害が確認された。

食害戸数（累計）：10戸（前年：12戸、前々年：9戸）

（3）防除上注意すべき事項

ア 一斉防除の効果が高いので、産地の防除暦等を活用して地域ぐるみで防除を行う。

イ 圃場内をよく見回り、見つけ次第捕殺する。

ウ 被害葉や被害果は圃場内から持ち出すとともに、野外に放置せずに速やかに適切に処分する。

エ 県内ではトマト、ミニトマト及びナスで発生が確認されている。海外では、タバコ、バレイショ、ホオズキ等のナス科作物やマメ科のインゲンマメも寄主植物として確認されている。

オ 本虫と類似するハモグリバエの食害痕は、葉裏からは確認できない。一方、本虫による食害痕は葉裏側からも透けて確認できる。

夏秋ピーマン

1 うどんこ病

(1) 予報内容

発生面積：やや少ない

発生量：やや少ない

(2) 予報根拠

ア 7月中旬の巡回調査では発生が認められず、発生圃場率、平均発病度ともに平年より低かった。

発生圃場率：0%（平年：24.7%、前年：0%）

平均発病度：0（平年：1.5、前年：0）

イ 本病は乾燥条件で発生が助長されるが、向こう1か月の気象予報によれば、降水量は、少ない確率40%、平年並40%と予想されている（気象情報参照）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 一旦発生すると防除が困難になるので早期発見に努め、防除は予防散布や初期散布に重点を置くとともに葉裏に十分薬剤がかかるようにする。施設栽培では硫黄粉剤50を株間散布し予防に努める。

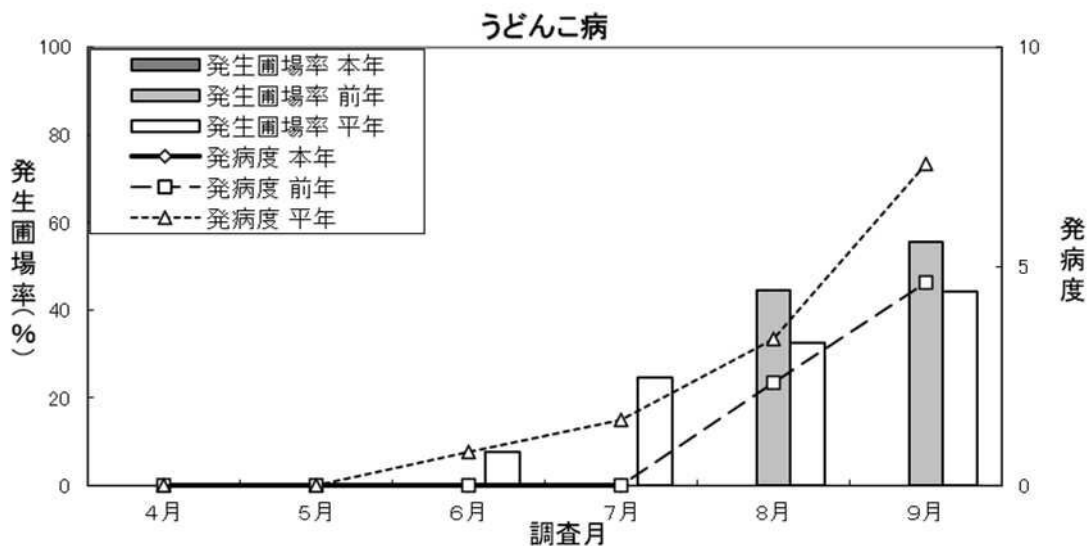
イ 8月下旬から9月にかけて急速に蔓延することがあるので、この時期の発生に注意する。

ウ 発病初期のうちに治療効果の高い薬剤を中心に、散布間隔を短くするなどして集中的に散布する。

エ 発病葉や発病して落葉した葉はなるべくこまめに除去し、処分する。

オ FRACコード「3」（EBI系薬剤）は連用すると耐性菌を生じやすいので、系統の異なる薬剤とのローテーション（輪番）使用を心がける。

カ 空気の流れが停滞し、乾燥した状態で発生しやすいので、施設内では換気を図るとともに過乾燥を避ける。



2 斑点病

(1) 予報内容

発生面積：やや多い

発生量：平年並

(2) 予報根拠

ア 7月中旬の巡回調査では、発生圃場率は平年より高く、平均発病葉率は平年よりやや高かった。

発生圃場率：55.6%（平年：32.5%、前年：66.7%）

平均発病葉率：3.1%（平年：2.6%、前年：5.3%）

イ 本病は多湿条件で発生が助長されるが、向こう1か月の気象予報によれば、降水量は、平年並40%、多い確率20%と予想されている（気象情報参照）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 一旦発生すると防除が困難になるので早期発見に努め、防除は予防散布や初期散布に重点を置くとともに葉裏に十分薬剤がかかるようにする。

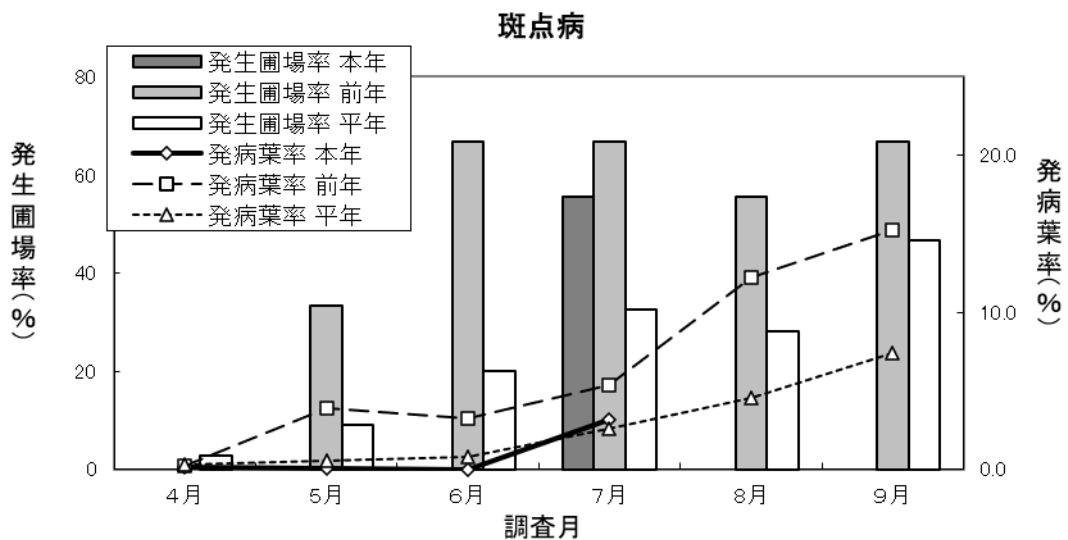
イ 発病初期のうちに治療効果の高い薬剤を中心に、散布間隔を短くするなどして集中的に散布する。

ウ FRACコード「3」（EBI系薬剤）は連用すると耐性菌を生じやすいので、系統の異なる薬剤とのローテーション（輪番）使用を心がける。

エ 高湿度が発生を助長するので施設では換気に努める。

オ 本病の被害により落葉した葉はできるだけこまめに圃場外へ持ち出して処分する。

カ 窒素不足等により株の樹勢が低下すると発病を助長するため、肥培管理に注意し、樹勢を維持するように心がける。



3 アブラムシ類

(1) 予報内容

発生面積：やや多い

発生量：やや多い

(2) 予報根拠

ア 7月中旬の巡回調査では、発生圃場率、50芯虫数ともに平年より高かった。

発生圃場率：22.2%（平年：6.8%、前年：0%）

平均50芯虫数：5.3頭（平年：0.4頭、前年：0頭）

イ 本虫は高温乾燥条件で発生が助長されるが、向こう1か月の気象予報によれば、平均気温は、平年並20%、高い確率70%、降水量は、少ない確率40%、平年並40%と予想されている（気象情報参照）。

(3) 防除上注意すべき事項

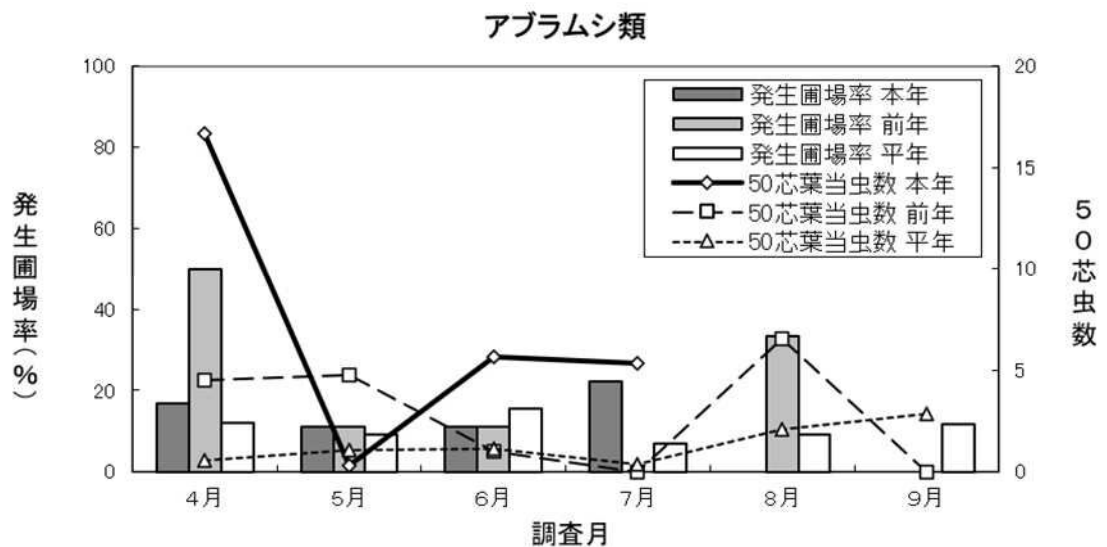
ア 本虫の成育は早く、急速に密度が高まる。また、高密度になると排泄物にすす病が発生し、果実が汚れるため低密度のうちに防除を行う。

イ 成幼虫は新芽、花卉等を吸汁加害し繁殖も旺盛なため、早期発見に努める。

ウ ワタアブラムシは、ネオニコチノイド系薬剤に対して感受性の低下が確認されている。

エ 同一系統薬剤を連続使用しないようにし、他系統薬剤とのローテーション（輪番）使用を行う。

オ 本虫は、モザイク病（CMV、PVY、BBWV）を媒介するので発生に注意し、初期防除を徹底する。



4 アザミウマ類（令和8年7月22日 病害虫発生予察注意報 第4号発表）

（1）予報内容

発生面積：多い

発生量：多い

（2）予報根拠

ア 7月中旬の巡回調査では、発生圃場率、平均寄生花率ともに平年より高かった。

発生圃場率：100 %（平年：53.2%、前年：77.8%）

平均寄生花率：37.8%（平年：12.9%、前年：21.6%）

イ 本虫は高温乾燥条件で発生が助長されるが、向こう1か月の気象予報によれば、平均気温は、平年並20%、高い確率70%、降水量は、少ない確率40%、平年並40%と予想されている（気象情報参照）。

（3）防除上注意すべき事項

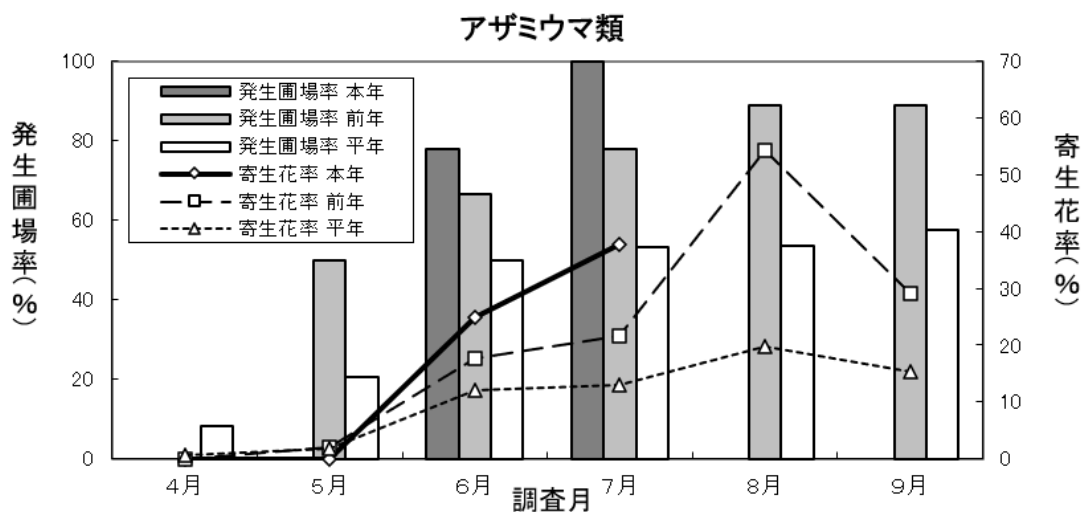
ア 本虫は葉裏、花卉、がくの内側等に潜み繁殖も旺盛なため、早期発見に努め低密度のうちに薬剤が植物体に十分かかるように防除を行う。

イ 本虫は多種の雑草にも寄生し増殖するので、圃場内外の除草を徹底する。

ウ 本虫は青色に誘引されるため、青色粘着トラップ等を設置し、発生状況の把握に努める。

エ ミカンキイロアザミウマは各種薬剤の感受性が低下しており、トマト黄化えそウイルス（TSWV）及びキク茎えそウイルス（CSNV）を媒介するので発生に注意し、初期防除を徹底する。

オ ヒラズハナアザミウマは各種薬剤の感受性が低下しており、トマト黄化えそウイルス（TSWV）を媒介するので発生に注意し初期防除を徹底する。



白ネギ（平坦地）

1 ネギアザミウマ（令和8年7月29日 病害虫発生予察技術情報 第8号発表）

（1）予報内容

発生面積：多い

発生量：平年並

（2）予報根拠

ア 7月中旬の巡回調査では、発生圃場率は平年より高く、平均被害度は平年並であった。

発生圃場率：100 %（平年：79.6%、前年：100 %）

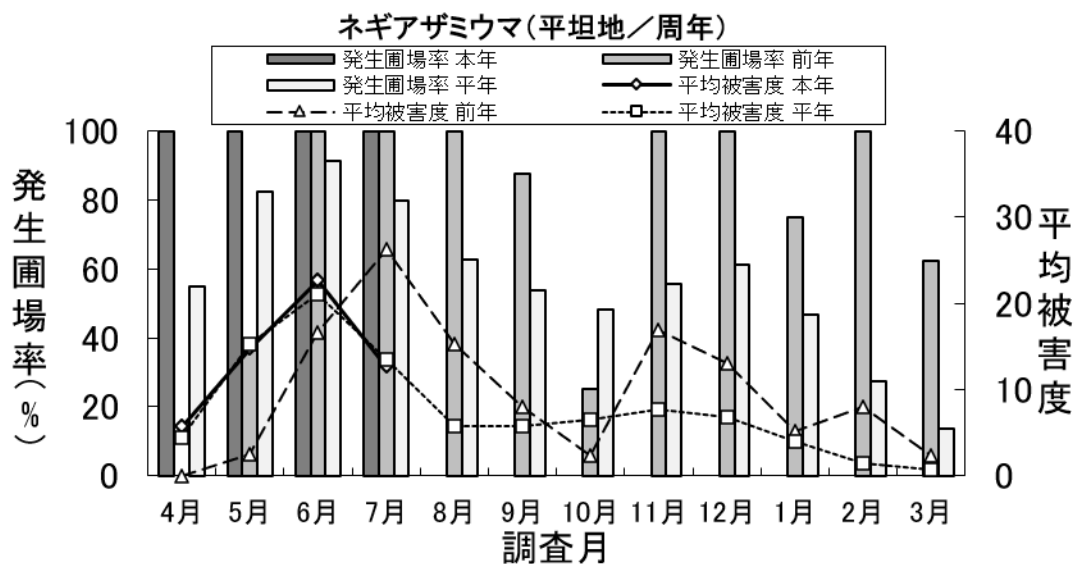
平均被害度：12.7（平年：13.5、前年：26.3）

イ 本虫は高温乾燥条件で発生が助長されるが、向こう1か月の気象予報によれば、平均気温は、平年並20%、高い確率70%、降水量は、少ない確率40%、平年並40%と予想されている（気象情報参照）。

（3）防除上注意すべき事項

ア 周辺雑草が発生源となりやすいので、圃場内外の除草を徹底する。

イ 本虫の増殖力は高く、寄生密度が上昇してからでは防除が困難となるので、早期発見に努め防除を行う。



2 ネギハモグリバエ

(1) 予報内容

発生面積：平年並

発生量：平年並

(2) 予報根拠

ア 7月中旬の巡回調査では、発生圃場率、平均被害度ともに平年より低かった。

発生圃場率：25.0%（平年：48.2%、前年：50.0%）

平均被害度：0.7（平年：3.2、前年：5.1）

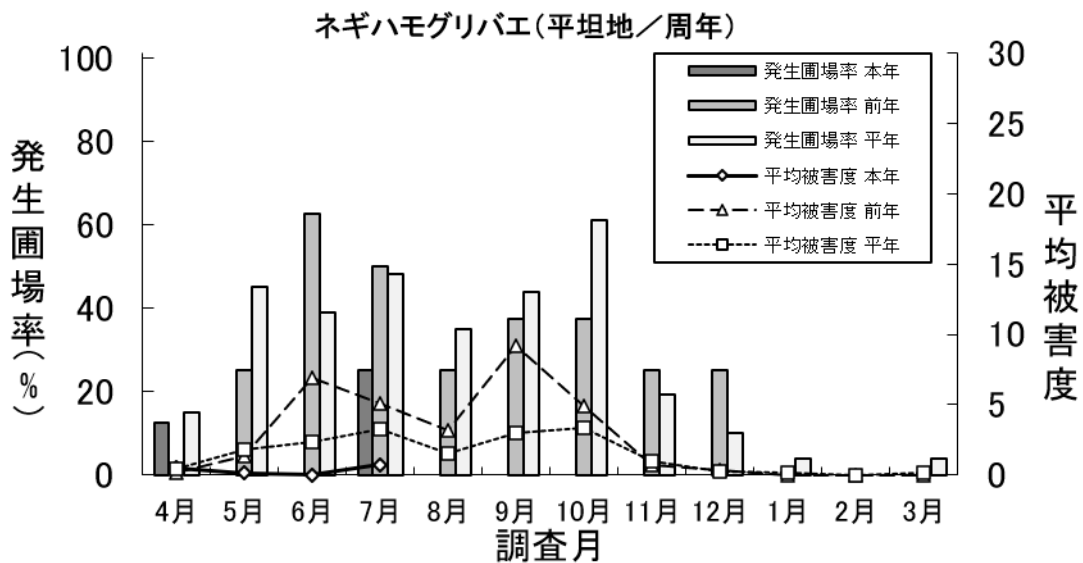
イ 本虫は25℃前後で発生が助長されるが、向こう1か月の気象予報によれば、平均気温は、平年並20%、高い確率70%と予想されている（気象情報参照）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 2020年に北部・豊肥地域において新たに確認されたネギハモグリバエ別系統（B系統）は従来系統と比較し1葉あたりの寄生虫数が多く、葉が白化するほど激しく食害する。両系統は形態での識別が困難なため、早期発見に努め、系統に関わらずネギハモグリバエまたはハモグリバエ類に適用のある薬剤を用い発生初期の防除を徹底する。

イ 被害葉及び収穫残渣は本虫の発生源となるので、圃場に放置せず1か所にまとめて積み上げ、ビニールで覆い裾部分を土で埋める等適切に処分する。

ウ 同一系統薬剤を連続使用しないようにし、他系統薬剤とのローテーション（輪番）使用を行う。



3 シロイチモジヨトウ（令和8年7月29日 病害虫発生予察技術情報 第8号発表）

（1）予報内容

発生面積：やや多い

発生量：やや多い

（2）予報根拠

ア 7月中旬の巡回調査では、発生圃場率、平均被害葉率は平年より高かった。

発生圃場率：62.5%（平年：38.0%、前年：65.5%）

平均被害葉率：3.8%（平年：1.9%、前年：2.5%）

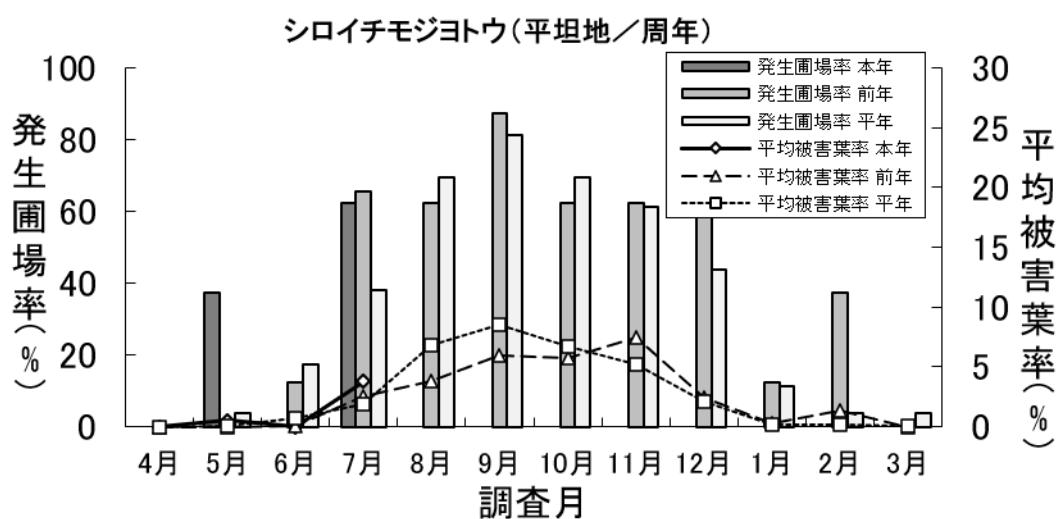
イ 本虫は高温乾燥条件で発生が助長されるが、向こう1か月の気象予報によれば、平均気温は、平年並20%、高い確率70%、降水量は、少ない確率40%、平年並40%と予想されている（気象情報参照）。

（3）防除上注意すべき事項

ア 本虫は成長に伴って防除効果が低下するため、早期発見に努め防除を行う。

イ 本虫は薬剤に対する抵抗性を獲得しやすいため、系統の異なる薬剤とのローテーション（輪番）使用を心がける。

ウ 一部地域の個体群でIRACコード「28」（ジアミド剤）およびIRACコード「15」（IGR系薬剤）に対する感受性の低下が確認されたため、散布後に防除効果の低下が見られる場合は使用を控える。



白ネギ（中山間地）

1 ネギアザミウマ

（１）予報内容

発生面積：平年並

発生量：平年並

（２）予報根拠

ア 7月中旬の巡回調査では、発生圃場率、平均被害度ともに平年より低かった。

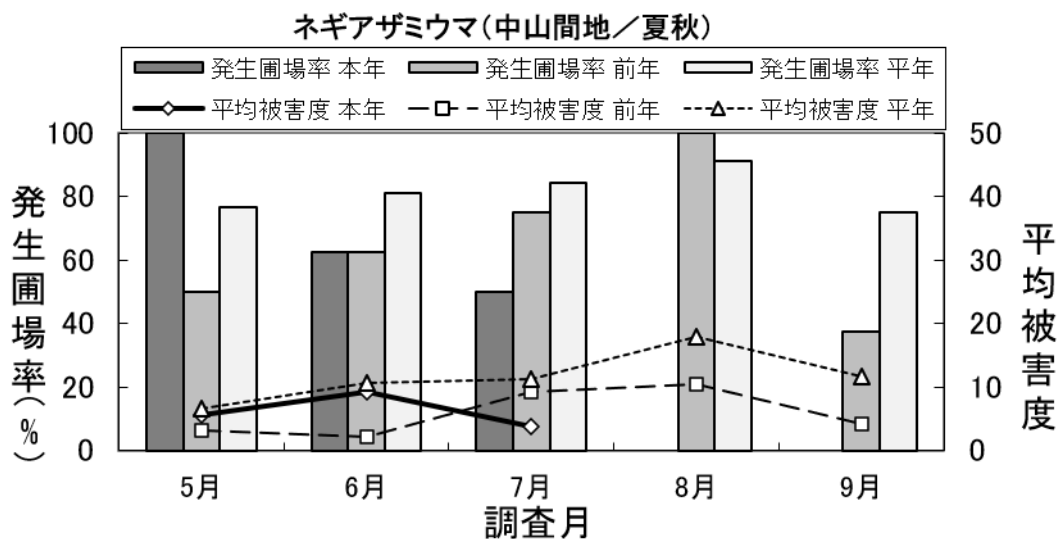
発生圃場率：50.0%（平年：84.4%、前年：75.0 %）

平均被害度：3.8（平年：11.3、前年：9.3）

イ 本虫は高温乾燥条件で発生が助長されるが、向こう1か月の気象予報によれば、平均気温は、平年並20%、高い確率70%、降水量は、少ない確率40%、平年並40%と予想されている（気象情報参照）。

（３）防除上注意すべき事項

白ネギ（平坦地）の項参照



2 ネギハモグリバエ

(1) 予報内容

発生面積：平年並

発生量：平年並

(2) 予報根拠

ア 7月中旬の巡回調査では、発生圃場率は平年より低く、平均被害度は平年よりやや低かった。

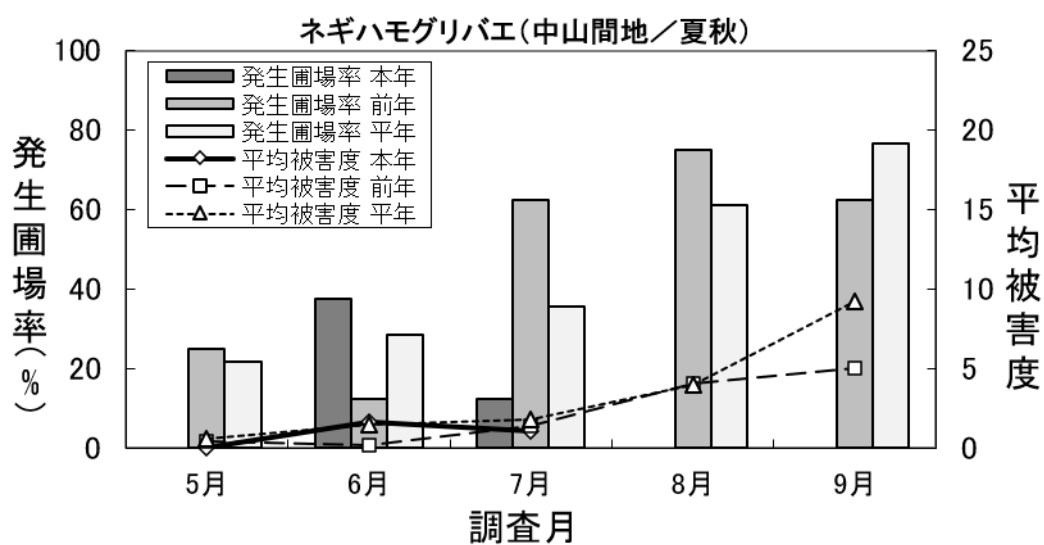
発生圃場率：12.5%（平年：35.7%、前年：62.5%）

平均被害度：1.1（平年：1.8、前年：1.4）

イ 本虫は25℃前後で発生が助長されるが、向こう1か月の気象予報によれば、平均気温は、平年並20%、高い確率70%と予想されている（気象情報参照）。

(3) 防除上注意すべき事項

白ネギ（平坦地）の項を参照



イチゴ

1 炭疽病

(1) 予報内容

発生面積：やや多い

発生量：平年並

(2) 予報根拠

ア 7月中旬の巡回調査では、発生圃場率、平均発病株率ともに平年より高かった。

発生圃場率：10.0%（平年：3.0%、前年：0%）

平均発病株率：0.4%（平年：0.2%、前年：0%）

イ 本病は、高温条件で発病が助長されるが、向こう1か月の気象予報によれば、平均気温は平年並20%、高い確率70%と予想されている（気象情報参照）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 苗をよく観察し、本病に特徴的な葉や葉柄の病斑の早期発見に努め、発病株は、周辺の株も含めて、圃場外に埋設するなどして処分する。

イ 水はねで伝染するため、育苗期は雨よけ栽培と全面マルチに努める。

ウ 頭上灌水やスプリンクラーは避け、灌水チューブを裏面にして直接葉に水がかからないように注意する。手灌水の場合は、水压を低くして病原菌が飛散しないようにする。

エ 一部地域ではFRACコード「11」（QoI剤：アゾキシストロビン、ピラクロストロビン混合剤）およびFRACコード「1」（ベンゾイミダゾール系薬剤：ベノミル）に対する感受性の低下が確認されたため、散布後に防除効果の低下が見られる場合は使用を控える。

2 うどんこ病

(1) 予報内容

発生面積：平年並

発生量：平年並

(2) 予報根拠

ア 7月中旬の巡回調査では、発生が認められず、発生圃場率、平均発病株率ともに平年より低かった。

発生圃場率：0%（平年：7.3%、前年：10.0%）

平均発病株率：0%（平年：1.6%、前年：2.0%）

イ 本病は、気温20℃程度が最も発病しやすいが、向こう1か月の気象予報によれば、平均気温は平年並20%、高い確率70%と予想されている（気象情報参照）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 初め葉裏に発生しやすいので注意し、早期発見に努める。

イ 発病初期に治療効果の高い薬剤を中心に、散布間を短くするなどして集中的に散布する。

ウ FRACコード「3」（EBI剤）やFRACコード「11」（ストロビルリン系薬剤）は連用すると耐性菌を生じやすいので、同一系統薬剤を連続使用しないようにするとともに、系統の異なる薬剤とのローテーション（輪番）使用を心がける。

エ 本圃に持ち込むと防除が困難となるため、育苗期の防除を徹底する。

※ 薬剤の詳細は大分県主要農作物病害虫及び雑草防除指導指針、又は各地区防除暦を参照する

気象台メモ

大分地方気象台

◎ 九州北部地方（山口県を含む）1か月予報（福岡管区気象台発表）

- ・ 発 表：令和8年7月23日（毎週木曜日に発表）
- ・ 予報期間：令和8年7月25日～令和8年8月24日

【予想される向こう1か月の天候】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

平年に比べ晴れの日が多いでしょう。

平均気温は、高い確率 70%です。降水量は、平年並または少ない確率ともに 40%です。日照時間は、多い確率 50%です。

週別の気温は、1週目は、高い確率が 70%です。2週目は、高い確率が 80%です。3～4週目は、高い確率 50%です。

【向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（%）】

要 素	予 報 対 象 地 域	低い（少ない）	平年並	高い（多い）
気 温	九州北部地方（山口県を含む）	10	20	70
降 水 量	九州北部地方（山口県を含む）	40	40	20
日照時間	九州北部地方（山口県を含む）	20	30	50

◎ 九州北部地方（山口県を含む）3か月予報（福岡管区気象台発表）

- ・ 発 表：令和8年7月21日
- ・ 予報期間：令和8年8月～令和8年10月

【予想される向こう3か月の天候】

向こう3か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

平均気温は、平年並または高い確率ともに 40%です。

8月 平年と同様に晴れの日が多いでしょう。気温は、高い確率 50%です。

9月 天気は数日の周期で変わるでしょう。

10月 天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。気温は、平年並または高い確率ともに 40%です。

【向こう3か月の気温、降水量の各階級】

3か月	気温：平年並みか高い	降水量： ほぼ平年並
8月	気温： 高い	降水量： ほぼ平年並
9月	気温： ほぼ平年並み	降水量： ほぼ平年並
10月	気温：平年並みか高い	降水量： ほぼ平年並

【向こう3か月の気温の各階級の確率（%）】

気 温	予 報 対 象 地 域	低い	平年並	高い
3か月	九州北部地方（山口県を含む）	20	40	40
8月	九州北部地方（山口県を含む）	10	40	50
9月	九州北部地方（山口県を含む）	30	40	30
10月	九州北部地方（山口県を含む）	20	40	40

【向こう3か月の降水量の各階級の確率（%）】

降 水 量	予 報 対 象 地 域	少ない	平年並	多い
3か月	九州北部地方（山口県を含む）	40	30	30
8月	九州北部地方（山口県を含む）	30	40	30
9月	九州北部地方（山口県を含む）	40	30	30
10月	九州北部地方（山口県を含む）	30	40	30

◎ 最近 1 か月の天候経過（令和 8 年 6 月下旬から令和 8 年 7 月中旬の天候）

6月下旬（多雨）

天気は、高気圧に覆われて晴れる日もあったが、低気圧や前線、気圧の谷や湿った空気の影響で曇りや雨の日が多かった。気温は、平年より低かった。降水量は、平年よりかなり多いが多かった（多雨）。日照時間は、平年並か少なかった。

※大分市の旬平均気温は 22.5℃で平年より低かった。旬降水量は 294.0 ミリで平年より多かった。旬日照時間は 24.6 時間で平年より少なかった。

7月上旬

天気は、前半は梅雨前線や湿った空気の影響を受けて曇りや雨となる日が多く、大雨となった日もあった。後半は高気圧に覆われ晴れたが、湿った空気や日射の影響により、曇りや雨が降る日もあった。気温は平年より高いか平年並だった。降水量は平年より多かった。日照時間は、平年より多いか平年並だった。

5 日は杵築、武蔵で「日最大 10 分間降水量」の通年の 1 位の値を、杵築で「日最大 1 時間降水量」、佐賀関で「日最大 10 分間降水量」の 7 月の 1 位の値を更新した。

※大分市の旬平均気温は 26.0℃で平年並だった。旬降水量は 261.5 ミリで平年より多かった。旬日照時間は 43.7 時間で平年並だった。

7月中旬（高温）

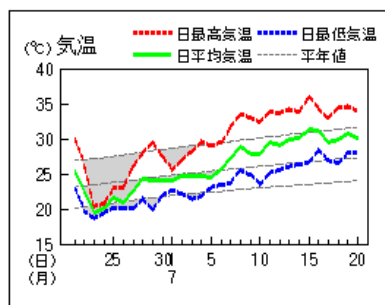
天気は、高気圧に覆われて晴れる日が多かったが、湿った空気や日射の影響により、曇りや雨が降る日があった。気温は、平年よりかなり高かった（高温）。降水量は、平年よりかなり少ないか少なかった。日照時間は、平年より多かった。

15 日は中津、湯布院で「日最低気温の高い方から」の通年の 1 位の値を、犬飼では 7 月の 1 位の値を更新した。20 日は豊後高田で「日最低気温の高い方から」の 7 月の 1 位の値を更新した。

※大分市の旬平均気温は 30.1℃で平年よりかなり高かった。旬降水量は 1.5 ミリで平年より少なかった。旬日照時間は 95.2 時間で平年より多かった。

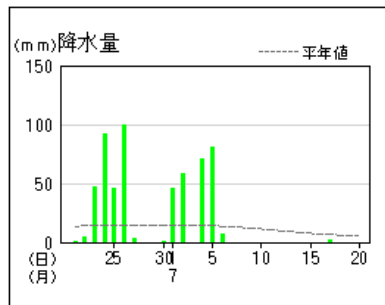
地上気象 気象経過図：2026年06月21日-2026年07月20日

大分



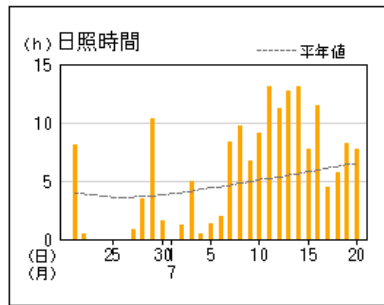
地上気象 気象経過図：2026年06月21日-2026年07月20日

大分



地上気象 気象経過図：2026年06月21日-2026年07月20日

大分



地上気象 気象経過図：2026年6月21日～2026年7月20日

適正防除はホームページで!!

<https://www.pref.oita.jp/site/oita-boujoshou/>

または

病虫害対策チーム

検索



【病虫害発生予察情報作成機関】

農業研究部

病虫害対策チーム

葉根菜類・茶業チーム

果樹グループ

花きグループ

地域農業振興課

安全農業班

大分県農林水産研究指導センター

農業研究部 病虫害対策チーム

〒879-7111 大分県豊後大野市三重町赤嶺 2328-8

Tel. 0974-28-2078

Fax. 0974-22-0940

大分県農林水産部地域農業振興課 安全農業班

〒870-8501 大分県大分市大手町 3-1-1

Tel. 097-506-3661

農薬は正しく安全に使いましょう!!